

## ○研究の視点と位置づけ

浮世絵には、写真と違い、構図、色づかい、不要物の捨消によるテーマの演出があり、実際の隅田川景観の完全な復元ではない。私たちはこのことを重視した。すなわち、主に実在の要素を扱ってしながら、敏感な絵師の目によって強調的にとらえられた、そして比較的評価の高い浮世絵の中の、川景観を対象とすることが重要であった。

そこで私たちは視点場と視対象のすべてについて、その存在を古地図、名所図会、又は浮世絵解説書によって確かめ、その位置をスケールの入った地図上にプロットすることによって、存在と位置を確かめることにした。

そして、主要素を選定するに当たっては、1. 絵の要素としての出現頻度が高く、2. 視覚的に際立ち、3. 当時の社会的際立ちが文献によって確認でき、かつ、4. 自然の美しさや親しさ、人の生き生きした様子や賑わい、又は歴史的価値において、現代隅田川景観の計画に示唆的なもの、という4項目すべてにおいて該当するものを拾うことにした。

本研究の特徴は、次の4点にある。

1. 絵を描いた視点場を特定し、スケールの入った約10kmの隅田川地図上にプロットし、その配置的特長を川全体と水辺部分への配置について捉えた。
2. そこからの景観要素の見えを、主に1) 距離、2) 仰・俯角、3) 注・静視野の区分、によって捉え、その評価的効果を予想しながら、視対象の見え特長を明らかにした。
3. 視点場と視対象のあいだを結んで視線とし、視線密度の濃い部分によって特定領域を捉えた。
4. 視対象には、単に固定視対象だけでなく、時候を表わす要素や人間行為といった変動視対象も取り入れた。

本研究は都市空間〈江戸・東京〉のなかの隅田川空間について扱っており、江戸～明治の浮世絵から読みとれる情報から、その景観の特徴をさぐり出そうというものである。

江戸・明治時代に描かれた浮世絵より読みとれる情報から、都市空間の景観特徴をさぐり出そうとする研究は、他にもいくつかある。

1. 北原理雄「名所図会に描かれた都市景観の研究、その1～その7」

『日本建築学会大会学術講演梗概集』（'85：7170、

’ 86 : 7080、’ 87 : 7143)

2. 樋口忠彦 A 「江戸の四季の名所について」『日本都市計画学会学術研究発表会論文集』(’ 81 : 64)  
B 「明治期東京の名所の変遷過程について(名所絵を対象にして)」『日本都市計画学会学術研究発表会論文集』(’ 82 : 86)
3. 鳴海邦碩他3名「浪花百景にみる大阪の景観構造 その1～その3」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(’ 88 : 7017～7019)
4. 萩島 哲他2名「浮世絵の分析による景観構造に関する基礎的研究：風景画の分析による都市的景観の構造に関する基礎的研究その4～6」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(’ 90 : 7050)
5. 大野秀敏他1名「描かれた江戸・東京にみる空間認識の変遷その1～2」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(’ 91 : 7052～7053)

など。

これらの研究が、その対象をひとつの都市全体(江戸・東京、大阪など)のマクロな視点から捉えているのに対して、本研究では、都市のなかの特定の河川空間に限定して、その固有の特徴をかなり細かく見て行くとする点に違いがある。浮世絵を題材にし、対象を隅田川に限定しているものは他に見当たらなかった。

前述の全ての研究において、視対象(構成要素)の内容については抽出しており、また、萩島以外の研究では、地図上に描写地をプロットする方法を用いている。

上記の研究で扱っている視対象の内容を以下に記す：

1. 北原は、寺院、街路、山並み等、25個の視対象を抽出し、さらに、主景観要素と全景観要素に分けて、出現数(率)をみている。
2. 樋口Aでは変動要素としての四季の景物を抽出し、さらに、描写地のプロットともあわせて、四季の名所の集中地区を11ヶ所、見出して

いる。

樋口Bでは役所、学校等に、四季の名所も含め、描かれた内容の明治初期から末期までの時代的な移り変わりをみている。

3. 鳴海は「上町台地」に着目し、描かれた景を、台地そのものを描いた景と台地から遠景を見晴らした景にわけている。また、ランドマークとして、大阪城、両本願寺など、主に4つをあげ、その見え方について、とらえている。

4. 萩島は、緑、道、建物、水、橋などのジャンルごとに構成要素をあげ近景、中景、遠景に分けて集計している。

そしてその傾向を出すとともに、要素の近・中・遠の連続性を調べている。また、要素中の人物に関しては、絵中より距離を推測し、その描かれた範囲を中景、近景、超近景に分けてとらえられている。

5. 大野は画面中の最も遠くに描かれた固定視対象（富士山、筑波山、江戸湾など）を抽出し、視点場からそれへ引いた視線が、江戸の場合は、江戸の境界線を越え、明治の場合は越えないことをつきとめ、江戸と明治東京の人々のとらえていた都市像の違いをあきらかにしている。

## ○研究の目的

隅田川は江戸時代からずっと、町の精神的な軸線であった。かつての隅田川景観の美しさと、いきいきとした様や賑わい、そして、そこには評価の要因となる景観要素とそれらの川に対する配置と見えに関する特徴があるように思われる。そこで、それらを見いだし、整理することをこの研究の目的とし、次に挙げる3項目に限定した。

目的① 現代隅田川において具体的に保存・復活すべき代表景を選定する。

目的② 代表景の景観特長を生み出している「視点場の配置」・「視対象の見え」に関する手法を獲得する。そして保存・復活の際の手法の手がかりとする。

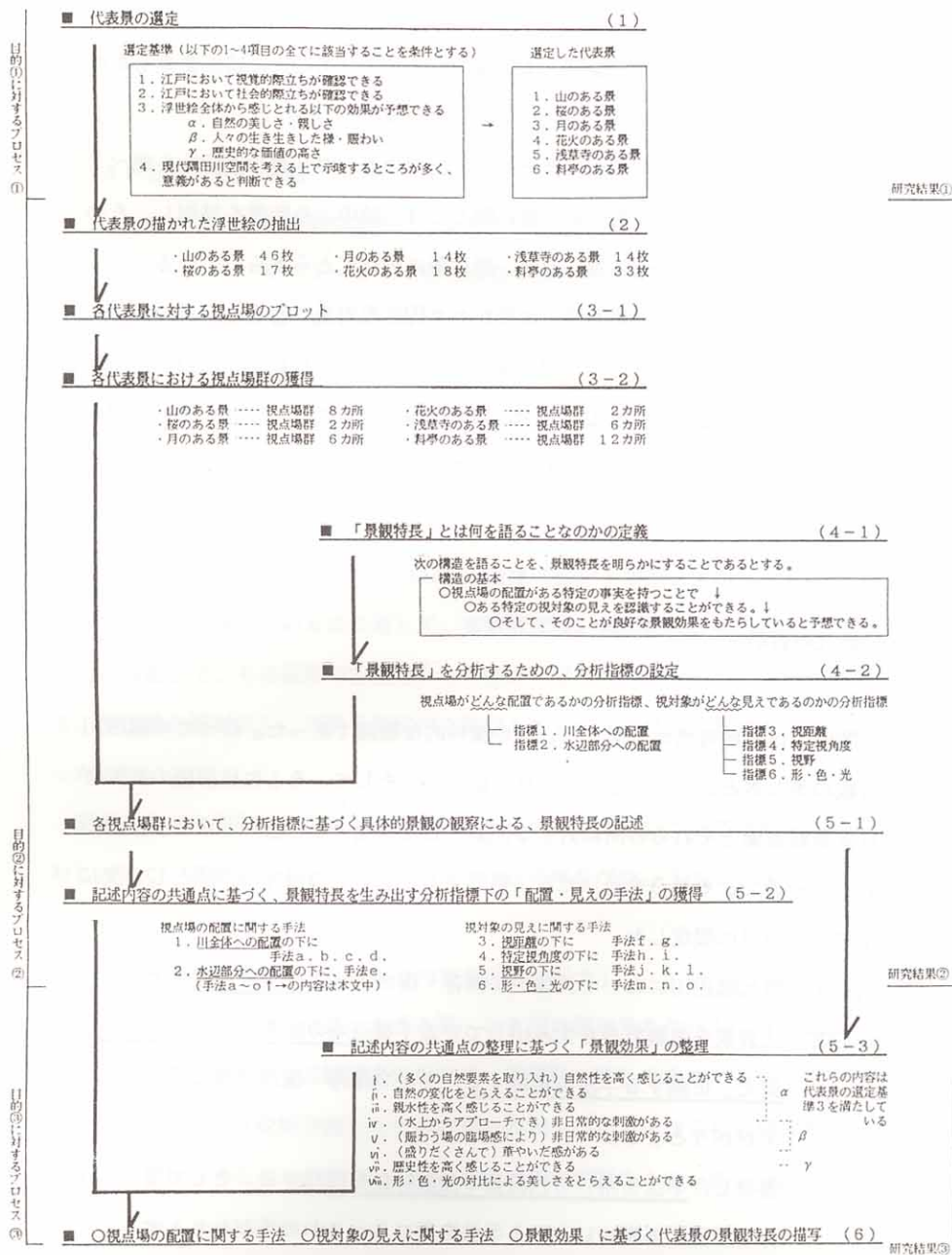
目的③ 獲得した手法を用いて代表景の景観特長を描写する。そして復活・保存を計画する際にいかなる手法を用いるべきかの手がかりとする。

## ○研究手順

前述の研究目的、①、②、③を実現するために、研究方法及び手順を以下の表のように定め、研究結果、①、②、③を導いた。

(表中の■項目の流れが、研究の手順を示す。)

(表中の■項目の右に示す( )内は、当論文中の章番号を示す。)



## ○研究内容

### 1 章 代表景の選定

保存・復活に値する代表景を選定するにあたり、江戸の様々な視対象を取り入れた景の中から以下の選定基準1)～4)全てに該当するかの評価を行った。

- 1)江戸において視覚的際立ちが確認できる。
- 2)江戸において社会的際立ちが確認できる。
- 3)浮世絵から評価できる以下の効果が予想できる。

$\alpha$ ．自然の美しさ・親しさ

$\beta$ ．人々の生き生きした様・賑わい

$\gamma$ ．歴史的な価値の高さ

- 4)現代隅田川空間を考える上で示唆するところが多く、意義があると判断できる。

評価の結果として「山・桜・月・花火・浅草寺・料亭のある景」の6景を代表景として選定した。